



自主性と強制

昨年は、将棋界では藤井総太4冠、スポーツ界ではマスターズで優勝した松山秀樹選手、そしてメジャーリーガーとしてMVPを受賞した大谷翔平選手など、文化・スポーツの分野で日本の若者たちの活躍があり、コロナ禍で暗かった世相に光を与えてくれました。私たち日本人に夢と希望を与えてくれたと言ってもいいでしょう。(藤井総太4冠については、「青少年育成センターだより第125号」で取り上げています。防府市のホームページに載せていますのでぜひ読んでみてください)

大谷選手は、審判への礼儀正しい態度であったり、グラウンドに落ちているゴミ拾いをする姿がテレビに映し出されるなど、その姿に接した多くの人から賞賛されました。選手として一流、そして、人となりも一流なのでしょう。ここで、そのような大谷選手を育てた、高校時代の恩師の花巻東高校の佐々木監督の言葉を紹介します。子どもを育てる大人(親や教師、指導者等)が参考になるのではないのでしょうか。

・選手の才能をみる時のポイントはどこですかと問われた時、「身体能力は重要です。骨格は遺伝するので、親も観察します。さらに重視するのは、親が子どもにどんな言葉をかけているか、他の親とどんなふうに接しているか。親の育て方や考え方で子どものマインドは変わり、伸びしろに差が出ると感じています」

・部員たちには目的と目標の違いを伝え、目標達成するための数値を明確にし、事細かく設定させます。大谷や菊池はこの時にすでに目標としてメジャー入りをあげていました。何をやるにせよ生きていくには、この考え方が欠かせない。

・今春、野球部の卒業生が2浪して東京大学に合格しました。私は野球ではなく学力で生きていくべきだと伝えました。彼は東大という目標を掲げ、実現した。私は盆栽が趣味なのですが、指導者の仕事と似ています。盆栽は若木のときに枝に針金をつけて方向付けします。するとかたちが整って価値を増して輝く。必要であれば針金を掛けたり、時には外したりする。器を変えれば、根は大きく張って、幹も太くなる。環境を整えて、子どもたちの意識を変えて意欲を促していくということです。

・子どもの才能を開花させるには強制が必要なタイミングがあります。その点で、最近の教育は自主性の重視に偏り過ぎているように感じます。

・徒競走でいつも最下位で恥ずかしいと思う子がいるとします。でも順位をつけないのは変でしょう。少しでも順位を上げるためにどうしたらいいか、脱落しない方法を考えさせる。また、自分は運動は最下位でいいから、勉強ではトップになる、と考えてもいい。最初から子どもに見極めさせるのは難しいから、大人が少し助けてあげる。才能をつぶさないってそういうことだと思います。

(2021. 11. 8「オピニオン&フォーラム」 毎日新聞)

これらの言葉から、「親の育て方や考え方で子どもの伸びしろに差が出ること」「目標を細かく設定させること」「子どもの意識を変えて意欲を促すこと」「強制することも必要なこと」「子どもにあったものを見つけさせる時には大人が少し助けを出すこと」等が子どもを育てていく上で大切なことだと教えられます。

ここで、「強制」の是非について考えてみたいと思います。よく、「子どもに強制してはいけない。子どもの自主性を尊重して、任せること」だと言われます。子どもは任せられることで自分なりに創意工夫をして課題解決を図ろうとします。そして達成感を感じ、次も頑張ってみようという意欲にもつながります。しかし、それが間違った方向性、取組であった時は、強制的にでも方向性を変える必要があります。子どもの間違いに気付くために、私たち大人は子どもをよく理解し、寄り添いと見守りが大切なのだと思います。

文責＝青少年育成センター指導員 藤村